

九州国立博物館

紀要「東風西声」第20号 抜刷

2025（令和7）年3月

【連載】金子量重氏収集資料研究 2

影絵人形たちの再会

—金子量重コレクションのワヤン・クリとラーマーヤナ—

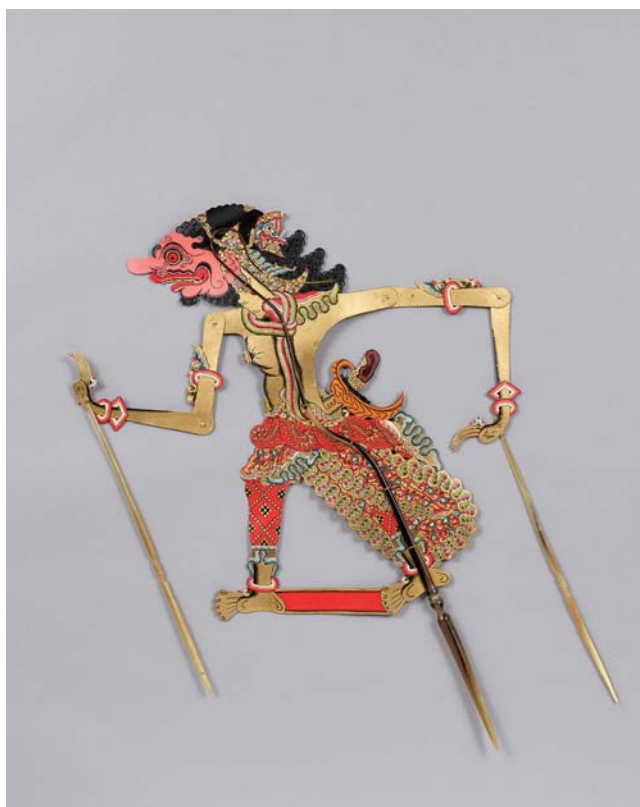
白 井 克 也



原色図版 4 K1216「ワヤン・クリ ウィルカタクシニ」
(落合晴彦撮影)



原色図版 5 K1217「ワヤン・クリ アンギスロノ」(落
合晴彦撮影)



原色図版 6 K1218「ワヤン・クリ トゥムンゲン・ジョ
ボ」(落合晴彦撮影)



原色図版 7 K1219「ワヤン・クリ ブラガルボ」(落合
晴彦撮影)



原色図版 8 K1220「ワヤン・クリ スマル」(落合晴彦撮影)



原色図版 9 K1221「ワヤン・クリ ビルン」(落合晴彦撮影)



原色図版10 K1222「ワヤン・クリ エムバン」(落合晴彦撮影)



原色図版11 K1223「ワヤン・クリ チャンギ」(落合晴彦撮影)



原色図版12 K1224「ワヤン・クリ リムプ」(落合晴彦撮影)



原色図版13 K1225「ワヤン・クリ チアントリク」(落合晴彦撮影)

【連載】金子量重氏収集資料研究2

影絵人形たちの再会

—金子量重コレクションのワヤン・クリとラーマーヤナ—

白井克也

はじめに

金子量重（かねこ・かずしげ）氏（1925～2017）が収集したアジア民族造形のコレクションは、九州国立博物館の開館を前後する時期に二度にわたって寄贈された。金子氏の没後にもコレクションの一部がご子息金子国緒氏より追加で寄贈された。これらは、九州国立博物館においてアジアの文化の多様性を示す実物資料として保存・展示されている。以下、金子量重氏の生前の収集品を「金子コレクション」と総称し、そのうち九州国立博物館への寄贈機会に従って本人によるものを「一次寄贈」、「二次寄贈」、国緒氏によるものを「三次寄贈」と呼ぶ。一次寄贈・二次寄贈品は、大部な図録『金子量重寄贈・論考アジアの民族造形』（金子量重2011。以下、『図録』）により全貌を知ることができるが、三次寄贈品の紹介は、九州国立博物館の今後の課題である。本稿ではそのうち、インドネシア、ジャワ島の伝統的な影絵芝居ワヤン・クリの人形を取り上げる。

金子量重氏は、『民族造形学序説—東南アジア篇—』（金子量重1994。以下、『序説』）において、当時所蔵していたワヤン・クリの一連のセットを紹介していた。その一部は一次寄贈・二次寄贈に含まれていたが、このたび三次寄贈が果たされたことにより、本来の一連のセットの大半が、九州国立博物館の所蔵品として18年ぶりの再会を遂げることとなった。

本稿では、『序説』での記述を手掛かりに、金子氏が収集した本来のワヤン・クリのセットの意義と、その後に作品が経験した流転について考察するとともに、今や金子氏の業績を顕彰するための重要資料となった『序説』の資料性にも論を及ぼすこととする。

議論の前提となる3つのキーワードについて、改めて整理しておこう。

金子コレクション

金子量重氏は、民族造形学の創始者であり、アジア各地で幅広く民族資料を収集した。その収集品が金子コレクションであり、一部を九州国立博物館が所蔵している。

『図録』には寄贈の年次については2003年とする記述もあるが、これは寄贈に向けた動きの開始を示す。正式の手続きは2005年以降である。

2005年に横浜の自宅所在の作品662件（ワヤン・クリは19件）が寄贈された（一次寄贈）。同年、九州国立博物館が開館し、文化交流展示室に「金子量重記念室」が開設される。

2006年には岩手県野田村所在の作品（509件、ワヤン・クリは28件）が寄贈された（二次寄贈）。

『図録』によると、作品の所在の違いにより一次寄贈と二次寄贈が分かれたという。猪熊兼樹氏の証言によると、一次寄贈は横浜の自宅に加え晴海の貸倉庫に所在した作品から、二次寄贈は野田

村所在のもののほか、横浜の自宅所在の作品も含んでいたという。金子氏は野田村に博物館をつくらうとしており、そのために作品が分散していたのである。

2009年には九州国立博物館で「金子量重氏寄贈品によるアジアの民族造形」が開催され、一次寄贈・二次寄贈の作品すべてを掲載した『図録』は2011年に刊行された。

2017年に金子量重氏が死去したのち、2023年に子息の国緒氏から、横浜の自宅に保管されていたコレクションと、横浜市内の展示施設に預けられていたコレクションのうち、55件（ワヤン・クリは10件）が九州国立博物館に寄贈された。ほかに、「あじっぱ」資料として114件も九州国立博物館に寄付された。

『ラーマーヤナ』

『ラーマーヤナ』は、古代インドの叙事詩であり、2000年以上前の詩人ヴァールミーキが編纂したとされている。『マハーバーラタ』と並び称され、いずれもヒンドゥー教の聖典とされている。

『ラーマーヤナ』の主人公は古代インドのコーサラ国の王子ラーマである。ラーマは弓の腕前を試す婿選びによって、ミティラー国の王女シーターと結ばれる。ラーマは王位を継承するはずであったが、父ダシャラタ王の妃の一人カイケーイーが息子バラタを王につけようとしたことから、ラーマやシーターは王宮から追放される。追放されたラーマは妃シーターらとともに森で過ごしていたが、魔王ラーヴァナは、シーターを妻にしようと考え、策略を用いて誘拐。ラーマは神猿ハヌマーンらの助けも借りて、シーターを取り返すため戦うというものである。

『ラーマーヤナ』はヒンドゥー教とともにインド各地や東南アジアなどに伝わり、芸能などと結びつきつつ各地で変容を遂げた。タイ版の『ラーマーヤナ』である『ラーマキエン』などがそれである。その後、イスラーム教が広まっても、愛好はやまず、今も絶えずアレンジされ続けている。

東南アジア各地での『ラーマーヤナ』の受容と変容は、金子氏の研究テーマでもあり、シンポジウムの成果が書籍にもまとめられている〔金子量重・坂田貞二・鈴木正崇1998〕。

ワヤン・クリ

ワヤン・クリとは、インドネシア、ジャワ島の伝統的影絵芝居人形である。インドネシア語で「ワヤン」は影、「クリ」は革を意味する。

人形は、スイギュウの革を切り抜いて透彫し、金彩と彩色の後に、可動部分をつなぎ、スイギュウの角製の棒をつけることで作られる。

ダランと呼ばれる人形遣いは即興のアレンジも加えつつ、一人ですべての人形を操作し、台詞を語り、さらに、伴奏のガムラン奏者たちに演奏の指示も与える。

人形の影は白幕（クリル）に投影されるが、観客は白幕に写った人形の影も、ダランが人形を操るさまも、自由に鑑賞できる。

本稿で取り上げる金子コレクションのワヤン・クリは、インドネシアのジャワ島で『ラーマーヤナ』の上演に用いられたものである。

ワヤン・クリで上演される作品はさまざまあるが、中部ジャワでは特に『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』が好まれる。

インドネシアでは8世紀ごろに『ラーマーヤナ』が伝わっていたようである。

インドネシアのジャワ島でワヤン・クリとして上演されるとき、地名やキャラクター名もサンスクリット語ではなくジャワ語で呼ばれる。主人公ラーマは「ロモ」、悪役ラーヴァナは「ラウォノ」

のようにである。

ストーリーもヴァールミーキの原典からはアレンジされている上、芸能であるため、演者や上演機会によって、ストーリーや設定すら自在に変化する。本稿では『ラーマーヤナの夕映え』〔松本亮1993、以下『夕映え』〕、『ワヤン人形図鑑』〔松本亮1982〕に依拠して、ジャワ語のキャラクター名や地名を用い、ストーリーや設定を解説する。サンスクリット名があるものは、初出の際に「ジャワ語名（＝サンスクリット名）」のように注記する。

1. 金子コレクションのワヤン・クリの特徴

1-1. 三次寄贈

金子コレクションのうち、一次寄贈・二次寄贈のワヤン・クリは、『図録』にすべての写真と基本データが掲載されている。情報の不備も散見され、一部はすでに指摘したところであるが〔白井克也2024〕、本稿では『図録』に掲載されていない三次寄贈のワヤン・クリ10件11体について紹介する。ただし、煩雑を避けるため、金子コレクションのワヤン・クリすべてに共通する特徴は、別途まとめて記載する。

K1216「ワヤン・クリ ウィルカタクシニ」(Wilkataksini、原色図版4)

『序説』のNo. 293-41に当たる。

全長93.1、像高63.0。

支持棒に紙片は残っていない。

ウィルカタクシニは『ラーマーヤナ』に登場するラウオノ（＝ラーヴァナ）の軍に属すラクササ（＝ラークシャサ、怪物）の一人で、全身が鱗に覆われた海の怪物。ブト・ボヨ（Buta Baya）ともいう。

『ラーマーヤナ』の演目「アノマン使者に立つ」で登場する。

アノマン（＝ハヌマーン）が空を飛んで怪物ラウオノの本拠地アルンコ国（＝ランカー）に偵察に向かうとき、海に潜んでいたウィルカタクシニは空飛ぶアノマンを海中から長い腕で捕まえ、大きな口で飲み込んだ。ウィルカタクシニののどに引っかかったアノマンは、風の神バユ（＝ヴァーユ）の力を宿している証しである、ポンチョノコの爪でウィルカタクシニののどを切り裂き、脱出した。



K1217「ワヤン・クリ アンギスロノ」(Anggisrana、原色図版 5)

『序説』の No. 293-39に当たる。

全長81.1、像高57.0。

支持棒に貼付された紙片に「Wilkataksini」と印字されているが、このキャラクターはウィルカタクシニではない。紙片には誤りも含むことがわかる。

アンギスロノは、ラウォノにつかえるラクササの一人であり、ラウォノの妹サルポクノコ(=シュールパナカー)の愛人。さまざまに姿を変えることができる。

ロモ(=ラーマ)がラウォノの本拠地アルンコ国まで橋をかけようとしたとき、アンギスロノはサルに化けて橋作りに紛れ込み、手抜き工事をした。橋が壊れると、サル族の王スグリウォ(=スグリーヴァ)は現場監督でラウォノの弟でもあるウィビソノ(=ヴィビーシャナ)を疑ったが、ウィビソノはサルたちの鳴き声を試し、アンギスロノを見破った。

K1219ブラガルボと体の部分の大きさと形が近く、細部の表現も似ている。

K1218トゥムングン・ジョボ(Tumenggung Jaba、原色図版 6)

『序説』の No. 293-43に当たる。

全長76.0、像高51.4。

支持棒に貼付されていた紙片に「Tumenggung Jaba」と印字されている。

トゥムングン・ジョボは外国の高官を表わす。「Patih Sabrang」とも呼ばれる。

『序説』では、種目「ロモ追放」の場面でチャントリク(後述)と並んで登場しており、K1225チャントリクを従えていたとみられる。



K1219「ワヤン・クリ ブラガルボ」(Bragalba、原色図版7)

『序説』のNo. 293-42に当たる。

全長80.7、像高56.9。

支持棒に貼付された紙片に「Pragalbo」と印字されている。

ブラガルボはラウォノにつかえるラクササの一人で、チャキルの一味。人が死ぬときに放棄すべき4つの欲望のうち、権力や成功を象徴する。

ブラガルボが象徴する権力や成功への欲望のほかには、チャキルが象徴する所有欲、幸福・美貌などの特権的な条件への欲、ブト・テロンが象徴する飲食の欲、ランブットグニが象徴する愛や官能への欲がある〔Katz-Harris, Felicia 2010〕。

K1217アングスロノと体の部分の大きさと形が近く、細部の表現も似ている。

K1220「ワヤン・クリ スマル」(Semar、原色図版8)

『序説』のNo. 293-44に当たる。

全長62.7、像高39.6。

支持棒に貼付された紙片に「Semar」と印字されている。

スマルはプノカワン（道化）の一人で、『ラーマヤナ』に限らず多くの演目に登場する。ワヤン・クリの設定ではトゴグの弟、天界の最高神ブトロ・グル（＝シヴァ神）の兄とされており、地上に降りて息子3人（ガレン、ペトル、バゴン）とともに活躍する。

両肩の関節を一連の可動部とするのは、プノカワンに多く、K1221ビルン、K1223チャンギ、K1224リムブ、K1225チャントリクも同様である。

特徴的な体格で、耳飾の代わりに唐辛子を差す。

『序説』によると、金子コレクションにはスマルの兄トゴグ、息子のガレン、ペトル、バゴンも含まれていたが、いずれも現在は所在不明である。



K1221「ワヤン・クリ ビルン」(Bilung、原色図版 9)

『序説』の No. 293-49に当たる。

全長53.7、像高33.6。

支持棒に貼付された紙片に「Bilung」と印字されている。

ビルンは、『ラーマーヤナ』に限らずワヤン・クリの様々な演目に登場するプノカワンの一人で、トゴグの弟分であり、異国人である。

腰帯に短剣クリス 3 振を差し、腰帯からクリス 1 振を吊るす。

『序説』173ページの表で、「ラウォノの最期」で用いるとして挙げられている「ラクササ (クシル)」＝「ラクササ・クチル」がビルンを表わすとみられる。



K1222「ワヤン・クリ エムバン」(Emban、原色図版10)

『序説』の No. 293-50に当たる。

K1222-1 全長52.4、像高35.3。

K1222-2 全長52.8、像高35.4。

K1222-1に貼付された紙片に「Emban」、K1222-2に貼付された紙片に「(2buah)」と印字。後者はもう1体のエムバンと対であることを意味する。

エムバンは宮廷の女官。ワヤン・クリのさまざまな演目にそっくりの2人1組で登場し、王宮で王の側にはべる。彼女たちが登場し、状況を説明する台詞を語ることで、観客たちは、場面が転換して王宮のシーンになったと知ることができる。

クリスを差していないのは異例か。



K1223「ワヤン・クリ チャンギ」(Cangik、原色図版11)

『序説』の No. 293-51のうち1体である。

全長52.6、像高35.8。

支持棒に貼付されていた紙片に「Cangik」と印字されている。

チャンギはワヤン・クリのさまざまな演目に登場する宮廷の女官。櫛を手に持ち、娘のリムブとともに、高貴な女性にはべる。

体格は違うが、表現、色遣い、服装・装身具の構成や文様は、娘の K1224リムブと共通する。



K1224「ワヤン・クリ リムブ」(Limbuk、原色図版12)

『序説』のNo. 293-51のうち1体である。

全長60.9、像高41.2。

支持棒に貼付されていた紙片に「Limbuk」と印字されている。

リムブはワヤン・クリのさまざまな演目に登場する宮廷の女官。母のチャンギとコンビを組み、高貴な女性にはべる。

体格は違うが、表現、色遣い、服装・装身具の構成や文様は、母のK1223チャンギと共通する。



K1225「ワヤン・クリ チェントリク」(Cantrik、原色図版13)

『序説』のNo. 293-52に当たる。

全長58.3、像高42.2。

支持棒に貼付されていた紙片に「Cantrik」と印字されている。

チェントリクはワヤン・クリのさまざまな演目に登場する脇役で、見習い、弟子、僧の従者の役割を務める。

『序説』では、チェントリクの名が『ラーマーヤナ』の種目「ロモ追放」で「トゥムンゲン」の名のすぐ下に置かれているところから見て、K1218トゥムンゲン・ジョボの従者を務めていたとみられる。



1・2. 共通の特徴

一次寄贈・二次寄贈・三次寄贈のワヤン・クリ、さらに『序説』に掲載されているが今は所在不明のものも含めて比較すると、重複するキャラクターがなく、キャラクターと法量の比に矛盾がなく、彩色の色調も一定しているなど、互いに作風がよく似ていて、明らかに一連のものであることがわかる。

さらに実物観察に基づき、細部も比較していこう。

素材として、本体はスイギュウの革、支持棒・操作棒にスイギュウの角、本体の部品をつなぐ可動部（関節）の軸にスイギュウの骨から削り出したものを用い、本体には金彩や彩色を行っている。ジャワ島ソロのワヤン・クリの材質として標準的なものである。ただし、関節の軸材には、古いものではスイギュウの革を用いる場合があり、新しいものではプラスチックや金属も用いる場合がある。支持棒・操作棒も、地域によっては木や竹を用いる場合があり、操演の時に損傷して木や竹のものに取り換えられることもある。新しいものではプラスチックの棒の場合もある。それらに比べ、金子コレクションのワヤン・クリの材質は斉一性が高い。

本体の革は比較的薄く、操演用のワヤン・クリではないようである。

鑿で細部を彫り出しているが、キャラクターの頭を天、顔を左に向けたときに手前になる側から鑿を打っている。表裏で図像の異なる2件のグヌンガン（K43、K703）では、鑿は表側の図像に対応しており、もちろん表側から打たれている。鑿の方向は、製作時の表裏の意識を反映している可能性がある。この鑿に関する特徴は、金子コレクションのワヤン・クリに限らず、ソロ地域のワヤン・クリに広くみられるようである。

彩色においては、ラクササなどの目が大きいキャラクターでは、目を赤く表現するものが多い。顔の皮膚と目を金彩以外の同色に塗る場合は少数あるが、赤でも顔の皮膚色でもない色を用いたものはない。

本体の胴と上腕、上腕と前腕をつなぐ部分では、双方の部品に孔（関節孔）をあけ、関節孔どうしを重ねてここに骨製の軸材をはめ込むのであるが、軸材の両端は幅が広がっているので、単純な孔だけでは軸材をはめ込むことができない。そのため、関節孔から伸びる短い切込みを入れるのであるが、その数は1条、2条、3条の場合がある。金子コレクションのワヤン・クリでは、関節孔からの切込みはすべての箇所でも2条である。切込みは直線的な場合と曲線的な場合があり、K707 スコサルヨ（＝カウサリヤー）では曲線と直線を併用されている。

中央の支持棒は本体に橙色または赤色の糸で固定し、両手の操作棒は手と白い糸で緩くつないでいる。このうち、支持棒を本体に固定する糸は、男性キャラクターでは赤色、女性キャラクターの多くと器物などでは橙色のものをを用いている。2色を併用した例あり、女性キャラクターのK711 スミトロ（＝スミトラ）では、赤色と橙色が併用されている。一連のワヤン・クリを製作するとき、一方の色の糸を使い切ってしまったため、別の色に変更して製作を継続したことが考えられる。

支持棒には、アルファベットでキャラクター名を印字した紙片を支持棒にセロテープで貼っている。いずれも、キャラクターの頭を天、顔を左に向けたときに手前になる方に必ず貼られており、一括してディスプレイされていたことをうかがわせる。

人物以外のワヤン・クリでは、支持棒の先端の長さを変えたものがあるが、支持棒の先端が長い方の面と、セロテープで紙片が貼られている面、鑿を打った方の面は共通している。このことは、作品の表裏に関する意識が、金子コレクションのワヤン・クリのすべてに共通していることを示している。

以上のことから金子コレクションのワヤン・クリは短期間に同一工房で製作した一連の作品とみなされる。

1-3. 『ラーマーヤナ』へのこだわり

金子コレクションのワヤン・クリは、中部ジャワのソロ（スラカルタ）の作品で、古代インドの叙事詩『ラーマーヤナ』を上演するためのものであることが最大の特徴である。

というのも日本国内に所蔵されるワヤン・クリのコレクションは、東京家政大学（松本亮コレクション）、東京国立博物館（横山平四郎コレクション、松本亮コレクション、田枝豪コレクションなど）、日本玩具博物館、中部大学民俗資料博物館、横浜人形の家、昭和女子大学光葉博物館、小池千枝コレクション世界の民俗人形博物館などに所蔵されているが、その多くは『マハーバーラタ』を上演するためのものである。

これは、ジャワ島でのワヤン・クリ上演の事情によるところが大きい。『ラーマーヤナ』は、おなじくインドの叙事詩『マハーバータ』に比べて上演機会が少ない。ワヤン・クリによる『ラーマーヤナ』の紹介にあたって、松本亮氏が苦勞を語られている通りである〔松本亮1993：438〕。

金子コレクションのワヤン・クリが日本国内では貴重な『ラーマーヤナ』のそれであることは、インド発祥の『ラーマーヤナ』が東南アジアで芸能と結びつきつつ変容を重ね伝播していったことを跡付けた金子氏の研究とも対応している。

1-4. ワヤン・クリの購入経緯

金子コレクションの一次寄贈・二次寄贈の際、九州国立博物館（仮称）設立準備室（当時）は研究員を派遣して金子コレクションを調査した。その際の調査カードによると、一連のワヤン・クリは1980年に製作され、1981年にジャワ島のジョグジャカルタで購入されたものとわかる。

ワヤン・クリの入手に関しては、都市伝説のような話が伝わっている。金子氏がインドネシアからダラン（人形遣い）を招いてワヤン・クリで『ラーマーヤナ』を上演してもらい、その時のワヤン・クリをまとめて買い取った、というのである。

しかし、これは事実ではない。金子コレクションのワヤン・クリは、スイギュウの革で作られた本体が薄手で、現実の操演には耐えられない（バリ島のワヤン・クリの製作と操演の両方を学ばれた梅田英春氏のご教示による）。

保存状態を見ても、保管環境によるとみられる劣化が一部にみられるものの、操演に伴う損傷は見受けられない。一部のワヤン・クリは戦闘シーンなどで激しく操演されるので、操演されたなら損傷は避けられないはずである。

また、金子コレクションのワヤン・クリの支持棒にはキャラクター名を印字した紙片がセロテープで貼られているが、実際に操演したなら、テープはすぐに剥がれてしまう。むしろ、この紙片の存在が、これらのワヤン・クリがディスプレイ用のものであることを示している。

猪熊兼樹氏の証言によると、この話は、インドの劇団の面や衣装に関するエピソードと混同されたものとのことである。

『序説』に写真が掲載されているもの以外、九州国立博物館所蔵の金子コレクションに、現物のワヤン・クリはない。したがって、金子コレクションのワヤン・クリは随時収集したものではなく、すべて一括で入手したと想定できる。その一方、『序説』に掲載されながら、所在が不明となっているワヤン・クリもある。『序説』の掲載写真は、掲載時点でのワヤン・クリのラインナップを示している。

製作と購入の両方の年次が明らかであることから見ても、金子コレクションのワヤン・クリは、金子氏が『ラーマーヤナ』のための一連のワヤン・クリを一括して発注・購入したものであるとみなされる。

2. 金子コレクションのワヤン・クリと『民族造形学序説』

2-1. 『ラーマーヤナ』の4つの「種目」

資料の一括性は、『序説』の一文からもうかがわれる。

「今回展示の人形は下記の4種目を演ずることができる」〔金子量重 1994：172〕。

続いて、金子氏の言う「種目」名に対し、対応する人形の名が表にまとめられている。4「種目」は「ロモ追放」「シント消ゆ」「アノマン使者に立つ」「ラウォノの最期」である〔金子量重 1994：173〕。

金子氏の挙げた4つの「種目」名は、日本にワヤン・クリを普及した松本亮氏によるワヤン・クリ版『ラーマーヤナ』の演目「ラコン」(lakon)の和訳名にほぼ合致する。また、『序説』の前年に松本氏が発表された『夕映え』の第九章、第十章、第十一章、第十四章の名称ともほぼ同じである。「消ゆ」「使者に立つ」などの言い回しまで共通していることから見て、松本氏の著作を参考にした可能性がある。ただし、ワヤン・クリの演目と『夕映え』の章立ては、同名であっても内容が完全には一致しない。金子氏のいう「種目」とは、そのいずれであろうか。あるいは独自の概念なのであろうか。

以下、金子氏による個別の「種目」を、現実のワヤン・クリの「演目」や、『夕映え』の章立てと比較しつつ、『序説』にいう「種目」の語義を解明し、「演ずることができる」が、ワヤン・クリ発注時の指示なのか、購入したワヤン・クリに対する解説なのか、検討する。

種目「ロモ追放」

『序説』で種目「ロモ追放」に挙げられた人形は次のとおりである。

表で用いられた名称には誤植が多いので、左端に表の中での表記を記載し、その右側に、対応する列品番号・キャラクター名・寄贈機会などを列挙する。

グヌンガン(2)	K43グヌンガン（一次寄贈）、K703グヌンガン（二次寄贈）
ドソロソ	K713ドソロト（二次寄贈）
クカイ	K51ケカイ（一次寄贈）
スコサルヨ	K707スコサルヨ（二次寄贈）
シント	K710シント（二次寄贈）
ロモ（若年）	K706ロモルゴウオ（二次寄贈）
レスモノ	K712レスモノ（二次寄贈）
スミトロ	K711スミトロ（二次寄贈）
バロト	バロト（所在不明、『図説』に写真も掲載されていない）

ペトル	ペトル（所在不明）
バゴン	バゴン（所在不明）

アンジャニ	K53アンジャニ（一次寄贈）
ゴトモ	K717ゴトモ（二次寄贈）
アノマン	K46アノマン（一次寄贈）
エムバン	K1222エムバン（三次寄贈）
トゥムンゲン	K1218トゥムンゲン・ジョボ（三次寄贈）
チャントリ	K1225チャントリク（三次寄贈）

ワヤン・クリの上演は、宇宙の山を表わすグヌンガンで始まり、グヌンガンで終わる。表の前半

は、アヨディヨ国（＝アヨーディヤー）の王族たちである。国王ドソロト（＝ダシャラタ）には妃スコサルヨが生んだ王子ロモ、妃ケカイ（＝カイケーイー）が生んだ王子バロト（＝バラタ）、妃スミトロが生んだ王子レスモノ（＝ラクシュマナ）があり、ロモには妻シント（＝シーター）がいる。

ロモは王位を継ぐはずであったが、ケカイの計略によりアヨディヨ国を追放されて森で過ごすことになる。

空白行の後、プノカワン（道化）のペトルとバゴンが登場する。空白行は場面転換を示すのであろう。

さらに空白行を挟むが、以降の登場人物は本来の演目「ロモ追放」(Rama Tundung)の登場人物ではない。アンジャニ（＝アンジャンナー）はゴトモの娘であり、アノマンの母であるが、アノマンを出産するときに死亡する。そうすると、後半部分の場面は演目「アノマンの誕生」(Lahirnya Anoman)なのではないかと疑われる。ジャワ島のワヤン・クリでは、アンジャニがロモの精液を宿すことによってアノマンが生まれるという設定で語られる場合があり、『夕映え』では、このエピソードを「第九章 ロモ追放」の中に含ませている。『序説』の種目「ロモ追放」は『夕映え』の「第九章 ロモ追放」に合致する。

種目「シント消ゆ」

『序説』で種目「シント消ゆ」に挙げられた人形は次のとおりである。

グヌンガン(2)	K43グヌンガン（一次寄贈）、K703グヌンガン（二次寄贈）
ロモ（若年）	K706ロモルゴウォ（二次寄贈）
シント	K710シント（二次寄贈）
レスモノ	K712レスモノ（二次寄贈）
ジャタユ	K55ジャタユ（一次寄贈）
スマル	K1220スマル（三次寄贈）
ガレン	ガレン（所在不明）
ペトル	ペトル（所在不明）
バゴン	バゴン（所在不明）
マリチョ	K57コロ・マリチョ（一次寄贈）
キダン・クンチョノ	キダン・クンチョノ（所在不明）
ラウオノ	K48ラウオノ（一次寄贈）
カキ・ピクン	K715カキ・ピクン（二次寄贈）
ジャタユ	K55ジャタユ（一次寄贈）

矢 K698、K699、K701パナのいずれか（二次寄贈）

ほぼ、演目「シント消ゆ」(Sinta Hilang)の進行に沿ってキャラクターが列挙されている。

ロモ、シント、ロモの弟レスモノはアヨディヨ国から追放されて森に入る。

空白行を挟んで、プノカワンの登場シーンがあり、さらに空白行を挟んで、シントが誘拐される

場面が続く。しかし、この間にあるはずの重要なシーンは、この表では触れられていない。

ラウオノの妹サルポクノコは、美男子の兄弟であるロモとレスモノを見て声をかけるが、相手にされないばかりか、屈辱を味わう。これを恨んだサルポクノコは、兄のラウオノをそそのかし、ロモの妻シントを誘拐させるのである。

しかし、表にはサルポクノコは登場しない、『序説』の図版に写真が掲載され、人形も現存するのに（K714サルポクノコ、二次寄贈）、『序説』の表に挙げるとの「種目」にも名前がない。

シントを誘拐するため、ラウオノの手下コロ・マリチョ（＝マーリーチャ）が変身能力を使って金色の鹿キダン・クンチョノに化け、シントの前に現れる。キダン・クンチョノを捕まえるようシントから求められたロモはその場を去り、さらにレスモノも、シントを結界で保護してキダン・クンチョノを探しにその場を離れる。

シントひとりになったところで、ラウオノは瀕死の老人カキ・ピクンに化け、シントの前に現れる。倒れるカキ・ピクンを見たシントが、思わず結界を出てこの哀れな老人を助けようとする、ラウオノは正体を現し、シントを捕まえて空に逃げ去ろうとする。

異変を知った巨鳥ジャタユ（＝ジャターユ）は、シントを救おうとラウオノに戦いを挑むが果たせず、深手を負う。

コロ・マリチョを倒したロモとレスモノが戻ってくると、シントの姿はない。重傷を負ったジャタユは、シントがアルンコ国のラウオノに連れ去られたという事実をロモに伝え、息を引き取るのであった。

サルポクノコに関わる一節を欠いていることや、ジャタユが重出するという疑問はあるものの、演目「シント消ゆ」のストーリーに沿ってキャラクターが列挙されていることがわかる。『夕映え』の「第十章 シント消ゆ」の大部分ともほぼ一致する。

種目「アノマン使者に立つ」

『序説』で種目「アノマン使者に立つ」に挙げられた人形は次のとおりである。

グヌンガン(2)	K43グヌンガン（一次寄贈）、K703グヌンガン（二次寄贈）
シント	K710シント（二次寄贈）
トリジョト	K56トリジョト（一次寄贈）
チャンギ	K1223チャンギ（三次寄贈）
リムブ	K1224リムブ（三次寄贈）
ラウオノ	K48ラウオノ（一次寄贈）
ガランガン	K718ガランガン（マンガース）（二次寄贈）
アノマン	K46アノマン（一次寄贈）
ラクソソ・プトラン	プラハスト（所在不明、『序説』図版では「ラクササ・プトラン」）
ブラガルボ	K1219ブラガルボ（三次寄贈）
ウイルタクシニ	K1216ウイルカタクシニ（三次寄贈）
ヤクソデウオ	サクソデウオか（所在不明）
インドラジト	インドラジト（所在不明、『序説』図版では「インドラジト」）
スマル	K1220スマル（三次寄贈）
ガレン	ガレン（所在不明）

ペトル	ペトル（所在不明）
バゴン	バゴン（所在不明）
トゴ	トゴグ（所在不明）
ランポガン	ラムポガン・アムピャク・ブト（怪物の軍勢）（一次寄贈）
ウイビソノ	K716ウイビソノ（二次寄贈）
ロモ（戴冠）	K52ロモウイジョヨ（一次寄贈）
レスモノ	K712レスモノ（二次寄贈）
スグリウオ	K45スグリウオ（一次寄贈）
バルノ（オントギゴ）	K723オントボゴ（二次寄贈、『序説』図版では「オントボゴ」）
武器	K701パナ（矢）（二次寄贈）
チュプ	K59チュプ（魔法の箱）（一次寄贈）
カリモソド	K60カリモソド（手紙）（一次寄贈）
ルキサトリ	K697ゴド（金棒）（二次寄贈、『序説』図版では「ゴド」）

人気の演目であり、登場キャラクターも多い。最初の部分はラウォノの本拠地アルンコ国に幽閉されているシントの描写である。シントの身の回りの世話はラウォノの姪トリジョト（＝トリジャーター）が担当していた。高貴な女性に使える女官の母娘であるチャンギとリムブの名が続く。トリジョトは父ウイビソノ（ラウォノの弟）と同様、姿も人間と同様であり、正義の人であった。ラウォノはシントに妻になるよう迫るが、シントは応ぜず、トリジョトもシントを守り抜く。

一方、ロモの陣営からは、アルンコ国の偵察のためアノマンが派遣された。アノマンは飛行能力によって海を越えアルンコ国に向かうが、水中に潜んでいたウィルカタクシニが長い手を伸ばしてアノマンを捕まえて飲み込んでしまい、アノマンは風の神バユの力の証であるポンチョノコの爪でウィルカタクシニの喉を切り裂いて難を逃れた。シントに会って無事を確認したアノマンは、帰還しようとするが、ラウォノの息子たちが立ちはだかる。ラウォノの子サクソデウオを倒すことはできたが、ラウォノの子で強敵のインドラジト（＝インドラジット）に敗れてつかまり、火あぶりにされる。

しかし、長い尾の先に火が付いたのを幸いに、アノマンが拘束を解いて暴れだし、アルンコ国はアノマンの尾についた火のために大火事で大混乱となる。

脱出するとき、アノマンは浜辺に倒れているウイビソノに出会う。ウイビソノはラウォノの弟だが清廉な人物で、シントを幽閉から解放するよう意見したがために兄のラウォノに殴られて気絶し、浜辺に捨てられていたのである。ウイビソノはロモに寝返ることにし、アノマンとともにロモのもとに向かう。

シントの所在と無事を確認したロモは、弟レスモノ、サル族の王スグリウオらとともに、海の向こうのアルンコ国への攻撃を決意する。ロモの必殺の矢パナ・グウォウイジョヨを放って海水を割ろうとしたが、海の神オントボゴが現れ、海の生物たちを守るためにも、武器を使うことは控え、アルンコ国まで橋をかけるよう助言する。

なお、表の末尾に「ルキサトリ」という言葉があるが、「ゴド・ルキサトリ」（Gada Lukitasari）は『マハーバーラタ』に登場するビモ（＝ビーマ）の武器である。これに該当する K697ゴド（金棒）に貼られた紙片には「Godo Rujakpolo」とあり、これは「ゴド・ルジャクポロ」（Gada Rujakpala）

を指し、やはり本来ビモの武器である。用語が混乱しているようである。

『序説』に種目「アノマン使者に立つ」として挙げられている内容は、『夕映え』の「第十一章 アノマン使者に立つ」の範囲と一致するが、登場キャラクターに若干の違いがある。

「アノマン使者に立つ」と、次の「ラウォノの最期」との間には、戦争中のさまざまな戦闘のシーンがあり、『夕映え』では「第十二章 シルガンゴの海を越えて」「第十三章 クムボカルノの昇天」がそれに当たる。

種目「ラウォノの最期」

『序説』で種目「ラウォノの最期」に挙げられた人形は次のとおりである。

グヌンガン(2)	K43グヌンガン（一次寄贈）、K703グヌンガン（二次寄贈）
ロモ（戴冠）	K52ロモウィジョヨ（一次寄贈）
レスモノ	K712レスモノ（二次寄贈）
ウイビソノ	K716ウイビソノ（二次寄贈）
スケリウオ	K45スグリウオ（一次寄贈）
アニロ	K47アニロ（一次寄贈）
アノマン	K46アノマン（一次寄贈）
エムバン(2)	K1222エムバン（三次寄贈）
ナロド	K722ナロド（二次寄贈）
イントラジト	インドラジト（所在不明、『序説』図版では「インドラジト」）
ペトル	ペトル（所在不明）
バゴン	バゴン（所在不明）
ラウオノ	K48ラウオノ（一次寄贈）
アンギスロノ	K1217アンギスロノ（三次寄贈）
インドロ	K50インドロ（一次寄贈）
シント	K710シント（二次寄贈）
トリジョト	K56トリジョト（一次寄贈）
ブロモ	K702ブロモ（二次寄贈）
ラクササ（クシル）	K1221ビルン（三次寄贈、『序説』図版では「ビルン」、別名「ラクササ・クチル」）
馬車(2)	K44クレト・クンチョノ（馬車）（一次寄贈）、K696クレト・プラン（戦車）（二次寄贈）
矢	K698、K699、K701パナのいずれか（二次寄贈）
チュプ	K59チュプ（魔法の箱）（一次寄贈）

最後の決戦のシーンなので、多くのキャラクターが登場する。アルンコ国に上陸すると、ロモの軍勢とラウォノの軍勢の激しい戦いが始まる。見せ場となる多くの対決のシーンは、実はこの列举の中にはない。戦いの終盤、ラウォノの息子で最強を誇るインドラジトがロモたちの前に立ち上がるが、ウイビソノに敗れる。インドラジトの最期をアンギスロノがラウォノに報告する。ロモは瞑想の中で天界守護の神インドロ（＝インドラ）の教えを受け、ついにラウォノと対決し、勝利す

る。

シントはトリジョトを伴ってロモのもとに戻ってきたが、ロモは長い年月幽閉されていたシントが自分を裏切っているのではないかと疑っていた。シントは潔白を証明するため、自ら炎の中に身を投ずる。しかし、炎の中でもシントはやけど一つせず、衣服も燃えることはなかった。火の神ブロモが彼女を守り、潔白を証明したからである。

以上のストーリーはワヤン・クリの演目「ラウォノの最期」(Dasamuka Lena)と「シント火に入る」(Sinta Obong)に該当する。『夕映え』では「第十三章 ラウォノの最期」にほぼ一致する。

『図説』の図版にはあるが4「種目」には登場しないワヤン・クリ

一方、『序説』に写真が掲載されていながら表に掲載されていないワヤン・クリもある。そのうちクムボカルノ(=クンバカルナ)に触れておこう。二次寄贈で九州国立博物館に入っている(K705)。

クムボカルノはラウォノの弟である。ブトロ・グルの呪いで外見が醜く心も邪悪な兄ラウォノや姉サルポクノコに比べ、クムボカルノは外見は巨体を誇るラクササ(怪物)であるが、心は清廉であった。ストーリー上では、クムボカルノはずっと眠っており、アルンコ国がロモの軍勢に攻撃されて劣勢となった時、ラウォノの要請によって眠りから覚める。クムボカルノは清い心を持っていたので、兄ラウォノの行いに非があることを重々承知していたが、アルンコの国と民のため、戦いに臨む。

この演目「クムボカルノの死」(Kumbakarna Gugur)は、「アノマン使者に立つ」(Anoman Duta)と「ラウォノの最期」(Dasamuka Lena)の間の戦闘エピソードの一つであり、『夕映え』では「第十三章 クムボカルノの昇天」に含まれる。

つまり、『序説』の表が挙げる4「種目」は、クムボカルノが最も活躍する部分を欠いているのである。

このほか、天界の最高神ブトロ・グルや、ラウォノの妹サルポクノコ、さらにサル族の多くが、『序説』では写真のみ掲載で、表に登場しない。

『序説』と『夕映え』

以上、『序説』の4「種目」を見てきた。どうやら4「種目」は、同名のワヤン・クリの「演目」(ラコン)ではなく、『夕映え』の同名の章とほぼ対応し、キャラクターの登場順もほぼ一致する。『序説』は『夕映え』の翌年に刊行されているので、金子氏が『夕映え』を参照した可能性はある。

金子氏は、『ラーマーヤナ』の4「種目」が上演できるようワヤン・クリを発注したというわけではなく、一連のワヤン・クリを購入したうえで、松本氏の知見により、4「種目」が上演できると説明づけたのであろう。

2-2. 現存しないワヤン・クリの問題

バロトの不在

バロトの人形は『序説』の図版には掲載されていないが、表のうち「ロモ追放」に掲載されている。

金子コレクションには実物の人形も伝わっていない。

これは不思議な現象である。演目「ロモ追放」にバロトは不可欠のキャラクターだからである。

バロトは、国王ドソロトの妃の一人ケカイの所生である。主人公ロモの異母弟に当たる。ロモは王太子として、ドソロト王の跡を継いでアヨディヨ国の王になる予定であったが、ケカイは自分からドソロトが受けた過去の恩などを挙げて、我が子バロトへの王位継承を迫った。その結果、ロモは森に追放されることとなる。

邪魔者を追い払って息子を王位につけることに成功したはずのケカイであったが、バロトは異母兄のロモを敬愛していたため、森にロモを訪ねて帰還を請う。

しかしロモの帰還は果たせず、ドソロト王の死去後、バロトは王位を拒絶して王宮には入らぬまま、ロモの帰還を待ちつつアヨディヨ国の政務を執るのである。

この演目において、バロトは不可欠のキャラクターであり、表にも記されている以上、1981年の購入時点では金子コレクションに含まれていたのであろうが、『序説』執筆時点で散逸していたか、あるいは保存上の問題を起こしていたと思われる。

スバリの不在

スバリ（＝ヴァーリン）の人形は『序説』の図版にも、表にも掲載されていない。

金子コレクションには実物の人形も伝わっていない。

以上の点には矛盾はなく、4「種目」にもスバリは直接にはかかわらないが、「シント消ゆ」と「アノマン使者に立つ」の間の重要なエピソードに関係するほか、ほかのワヤン・クリの品ぞろえからみても、スバリの不在は解せない。

スバリは『ラーマーヤナ』原典のヴァーリンにあたり、サル族の王スグリウォの兄に当たる。

ワヤン・クリでは、原典には存在しない、サル族たちがサルの姿になった由来譚を語る演目「チュプ・マニ・アストギノ」（Cupu Manik Astagina）がある。

それによると、スグリウォやスバリらは元は人間の姿であった。兄弟の父ゴトモは、妻マンドラティ（兄弟の母）が太陽神スルヨ（＝スーリヤ）から密かに魔法の箱チュプを受け取っていたことを知った。妻に裏切られたと思ったゴトモは、呪文で妻を石の塔に変え、チュプをはるか彼方に投げ捨てた。ゴトモの子供たちが、母の姿を元に戻すためにチュプの行方を捜したところ、チュプが落ちた地面には、チュプの魔力によって大きな池ができていた。チュプを探そうと池に入って水に触れたスバリ、スグリウォ、ジウムバワン（＝ジャムバヴァット）らは次々にサルの姿に変わってしまった。スグリウォらの妹アンジャンは、池には入らなかったものの、池の水を手ですくって顔を洗ったため、顔と手がサルになってしまった。

このエピソードは、ストーリー上、「ロモ追放」よりも以前のはずである。『夕映え』では「第二章 ゴトモの悲愁」に収められている。また、『序説』の表によると、種目「アノマン使者に立つ」「ラウォノの最期」の中にチュプが列挙されているが、なぜここに入っているのかも不明である。

スバリはその後、弟のスグリウォと不仲となる。それによると、天界の神インドロの依頼により、スイギュウの怪物マエソスロを退治したことをきっかけに、スグリウォは天界の妖精トロ（＝ターラー）と結婚する。しかし、怪物ラウォノは、トロがスグリウォにいじめられていると、スバリに吹き込み、怒ったスバリは、弟スグリウォを追放して、妻とサルの国を奪い取ってしまう。

ここで、「シント消ゆ」の後のロモと、スグリウォ、スバリの接点が生まれる。演目「ルシ・スバリの死」（Resi Subali Gugur）である。スグリウォは兄スバリに反撃して国を奪い返そうとするとき、シントを探して森をさまよっていたロモに出会う。ロモがスバリの討滅を手伝ったことによ

り、スグリウォはサル王となり、ロモへの恩返しのため、シントを奪い返す戦いに協力することになる。このエピソードは『夕映え』では「第十章 シント消ゆ」の末尾に置かれている。

サルたちの協力で、シントがラウォノの本拠地アルンコ国に幽閉されていることが明らかとなり、アノマンを偵察に派遣することになり、これが次の演目「アノマン使者に立つ」につながる。

ロモがスバリを殺したエピソードは、「アンゴド使者に立つ」(Anggada Duta) という演目にもかかわる。

ロモとラウォノの戦いが迫る中、スバリの遺児アンゴド(=アンガダ)がラウォノのもとに赴き、シントの解放を求めて交渉する。ラウォノは、アンゴドの実父スバリを殺したのはロモであると指摘し、寝返りを促すが、アンゴドは拒絶し、交渉は決裂、宣戦布告に至る。

アンゴドのワヤン・クリは金子コレクションに入っている(K704)が、『序説』の表には登場せず、「アンゴド使者に立つ」の上演は想定されていないようである。「アンゴド使者に立つ」は『夕映え』では「第十二章 シルガンゴの海を越えて」の末尾に収録されている。

スバリの不在については、『序説』の4「種目」の書き方から見て、当初から金子コレクションには含まれていなかった可能性が考えられる。

3. 金子コレクション一次寄贈と二次寄贈の方針

金子コレクションの一次寄贈・二次寄贈では、寄贈作品はすべて金子氏自身が選び、九州国立博物館から派遣された研究員には選択の機会は無かったという。では、金子氏は一次寄贈・二次寄贈のワヤン・クリをどのような基準で選んだのであろうか。それぞれのキャラクターの類別(神、アヨディヨ国、アルンコ国、サル族、プノカワン、召使、小道具など)、登場する演目などと、寄贈機会とを対比すると、一次寄贈と第二寄贈には一部のラクササやプノカワン、脇役を含んでいないことがわかる。それらの写真が掲載された『序説』76ページと77ページの見開きには、一次寄贈・二次寄贈に属するワヤン・クリは一体もなく、その反面、三次寄贈のワヤン・クリはすべてこの見開きの中に納まっているのである。

三次寄贈のワヤン・クリを含む、『序説』76ページ、77ページのキャラクターたちは、サンスクリット版『ラーマヤナ』原典に登場しない、インドネシアのワヤン・クリの独自キャラクターたちである。『ラーマヤナ』の東南アジアでの変容を研究テーマとした金子氏は、原典に存在しないキャラクターに、関心が薄かったのであろうか。

一方、『序説』に写真が掲載された重要キャラクターで、三度の寄贈に含まれず、行方不明になったものもある。キダン・クンチョノやインドラジトなどである。

『序説』の4「種目」の解説において述べたとおり、キダン・クンチョノは種目「シント消ゆ」において、ラウォノがシントを誘拐するときロモをシントから引き離す役割を担う。インドラジトは種目「アノマン使者に立つ」と種目「ラウォノの最期」において、アノマンやロモに立ちはだかる強敵である。

これらが三度の寄贈からすべて漏れて所在不明であることは、一次寄贈・二次寄贈の時点でこれらがすでに散逸したか、保存不良であったと推定できる。

一次寄贈と二次寄贈のワヤン・クリを比較すると、キャラクターや4「種目」との明確な相関関

係は見出しがたく、別の要因で分けられたことがわかる。

すでに述べたように、『図録』や猪熊氏の証言によると、金子氏は野田村に博物館を開設しようとしていたので、そのために作品が泣き別れになっていたことが一次寄贈と二次寄贈の違いになったと考えられるが、その場合も、野田村での展示候補作品（二次寄贈に相当）の選択の基準は、やはり不明のままである。

おわりに

九州国立博物館に寄贈された金子量重コレクションのワヤン・クリに関して紹介した。

さらに、一連のワヤン・クリの中から金子氏が九州国立博物館への寄贈作品を選んだ意図を推定し、コレクションを掲載した基本文献である『序説』の資料性も検討した。

本研究は JSPS 科研費 JP18H03598 の助成を受けた。

金子コレクションの一次寄贈・二次寄贈の経緯に関しては、九州国立博物館の解説に関わった楠井隆志氏、猪熊兼樹氏に聞き取りを行った。

なお、本稿の内容は、2024年5月28日から9月8日（日）まで開催した文化交流展「新たに加わったアジアの民族造形」、2023年12月16日に比較文明学会九州支部第77回研究会（西南学院大学百年館セミナー室）で講演した「金子量重コレクションのワヤン・クリとラーマーヤナ」、2024年6月1日のきゅーはく☆とおき講座「影絵人形たちの再会—金子量重コレクションのワヤン・クリ—」、2024年8月13日のミュージアムトーク「ワヤン・クリのバイプレーヤーたち」において一部を公表している。

ワヤン・クリを含む九州国立博物館所蔵の金子量重コレクションは、「ColBase：国立文化財機構所蔵品統合検索システム」（<https://colbase.nich.go.jp/>）、および九州国立博物館ウェブサイトの「収蔵品ギャラリー」（<https://collection.kyuhaku.jp/gallery/>）において、画像や基本情報を閲覧できる。

参考文献

- 金子量重 1994『民族造形学序説—東南アジア篇—』、東京、アジア民族造形文化研究所
金子量重 2011『金子量重寄贈・論考アジアの民族造形』、太宰府、九州国立博物館
金子量重・坂田貞二・鈴木正崇 1998『ラーマーヤナの宇宙—伝承と民族造形』、東京、春秋社
松本亮 1982『ワヤン人形図鑑』、東京、めこん
松本亮 1993『ラーマーヤナの夕映え』、東京、八幡山書房
Felicia Katz-Harris 2010『Inside the Pappet Box』 Santa Fe, Museum of International Folk art

図版目次

- 原色図版 4 K1216「ワヤン・クリ ウィルカタクシニ」（落合晴彦撮影）
原色図版 5 K1217「ワヤン・クリ アンギスロノ」（落合晴彦撮影）
原色図版 6 K1218「ワヤン・クリ トゥムンゲン・ジョボ」（落合晴彦撮影）
原色図版 7 K1219「ワヤン・クリ ブラガルボ」（落合晴彦撮影）

原色図版 8 K1220「ワヤン・クリ スマル」(落合晴彦撮影)
原色図版 9 K1221「ワヤン・クリ ビルン」(落合晴彦撮影)
原色図版10 K1222「ワヤン・クリ エムバン」(落合晴彦撮影)
原色図版11 K1223「ワヤン・クリ チャンギ」(落合晴彦撮影)
原色図版12 K1224「ワヤン・クリ リムプ」(落合晴彦撮影)
原色図版13 K1225「ワヤン・クリ チアントリク」(落合晴彦撮影)

(しらい かつや 当館学芸部長)